

特集



- ・HKFA活動報告
- ・第4種委員会
- ・千歳地区サッカー協会
- ・宗谷地区サッカー協会
- ・北海道チャレンジドサッカー連盟
- ・ウォーキングフットボールの取り組み
- ・医学委員会
- ・オホーツク地区サッカー協会
- ・北海道自治体職員サッカー連盟

HKFA2025 活動報告



**北海道のサッカーは
競技としての魅力にとどまらず、
人と人をつなぎ、地域に活力を
もたらしています**

2025年度も北海道内ではサッカーの活動が着実に展開され、その裾野はゆるやかに、しかし確実に広がっています。安定した活動の継続と質の向上を両立しながら、地域社会との連携を深め、北海道のスポーツ文化の発展に取り組んできました。

公益財団法人北海道サッカー協会 会長 越山 賢一

HKFA中期ビジョンにおける2025年度KPI

北海道サッカーの現在地

2025年度総合達成率

81.1%

中期ビジョンの目標に対し各目標を合算した総合的数値。2028年度に向け確かな一歩を刻んでいます。



全国大会BEST4(達成率80.0%)
4チーム

目標5チーム

北海道代表は全国大会において4チームがベスト4進出を果たしました。目標の5チームには一歩届かなかったものの、全国トップレベルで戦える力を持つことを改めて示しました。

選手登録数(達成率98.3%)
31,450人

目標32,000人

選手登録数は31,450人となり、目標にはわずかに届かなかったものの、高い水準を維持しています。

自主財源獲得(達成率65.0%)
130万円

目標200万円

目標の200万円に対し、さらなる改善・戦略が必要な重要な領域。今後さらなる工夫と戦略が求められます。

今後に向けて

2028年度に向けて、これまでの成果を土台としながら、より多くの人々にサッカーの価値を届け、地域に根ざした活動を一層充実させていきます。

公益目的事業の実績

地域に広がる参加の機会



22,598人
1,365チーム

普及振興事業には22,598人・1,365チームが参加。地域における受け皿は着実に広がり、多くの人々がサッカーに親しむ環境が整っています。

北海道全体を支える競技環境



41,714人
1,832チーム

競技会開催事業では、延べ41,714人・1,832チームが参加しました。北海道全域にわたって大会が実施され、各年代・各カテゴリーの競技機会がしっかりと確保されています。

サッカーを支える人材づくり



12,371人
(年間415回開催)

指導者・審判員の養成事業では、年間415回の講習会を開催し、延べ12,371人が参加しました。継続的な学びの機会を通じて、サッカーを支える人材の質の向上が図られています。

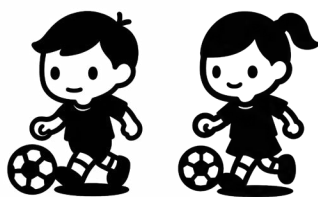
未来につながる育成の充実



6,573人

競技力向上事業には6,573人が参加。一回ごとの内容の質と精度を高めることで、より実践的で充実した育成環境が整えられています。

ウォーキングフットボールの取り組み



HKFA中期ビジョンの重点領域である普及活動として、サッカー未経験者が参加しやすい環境を整備し、地域交流の促進や健康増進にウォーキングフットボールが適していると考え、ウォーキングフットボールが楽しめる場をコーディネートする人を養成し、実際に道内在中のファミリー向けにイベントを開催しました。

ウォーキングフットボールとは…

2011年にイングランドで生まれた「歩いて行うサッカー」

サッカー未経験でも、運動が苦手でも、障害があってもプレーできます



走るの禁止



ヘディング禁止



接触禁止



スライディング禁止

ウォーキングフットボール コーディネーター講習会

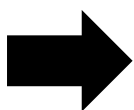
日程 : 2025年7月13日(日) 場所 : 札幌サッカーアミューズメントパーク
参加者 : 18名 (各地区協会から1名ずつ+HKFA関係者4名)

座学と実践を通してルールを学び、実際にプレーをして、ウォーキングフットボールを楽しむ場をコーディネートする人材を養成しました。コーディネーターの増加によって、各地区協会での実施体制が少しずつ整ってきています

道内ウォーキングフットボールコーディネーター人数

2024年度

6名



2025年度

43名



JFA×KIRIN キリンファミリーチャレンジカップ

日程 : 2025年10月4日(土) 場所 : つどーむ (札幌市スポーツ交流施設 コミュニティドーム)
参加者 : 32チーム292名

老若男女、障がいの有無に関わらず、ウォーキングフットボールというスポーツを一切体験したことのない方々をお招きして実施・体験いただくことができました。親子三世代での参加チームがあるなど、終始和やかな雰囲気になりました。

また、当日は元SAMURAI BLUEの柏木陽介さん、安田理大さん、柿谷曜一朗さん、元なでしこジャパンの近賀ゆかりさん、宮間あやさんにお越しいただき、参加者と共にウォーキングフットボールをプレーし、会場を盛り上げていただきました。

ピッチのコーディネーターには、7月のコーディネーター講習会受講者も参加し、実際のイベントを体験することで、地区でのウォーキングフットボールを普及するヒントを得られました。



今後に向けて

2026年度を「地域展開へ移行の年」として、更なる広がりを目指して取り組んでいきます

- ✓ コーディネーター講習会の実施
- ✓ 各地区でのウォーキングフットボールの活動支援
- ✓ HKFAすきまフットボール部会と連携した体験会の実施

北海道 4 種年代 サッカーの 持続的发展を 目指して



公益財団法人北海道サッカー協会 第4種委員会 委員長 尾見 秀樹

2026年、FIFAワールドカップがいよいよ開催されます。世界最高峰の舞台で繰り広げられる熱戦は、子どもたちに「いつか世界へ」という夢と目標を与えてくれます。北海道の4種年代の選手たちにも、仲間とともにボールを追いかけながら、その夢に向かって成長し続けてほしいと願っております。

日頃より、指導者・審判員・保護者・関係者の皆様には、北海道の4種年代サッカーの発展に多大なるご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

北海道の4種年代のサッカーは、広大な地域性の中で各地区に根差した活動を積み重ねながら発展を続けてまいりました。子どもたちは四季折々の自然の中で仲間とともにボールを追いかけ、喜びや悔しさを経験しながら心身ともに成長しております。これもひとえに、現場を支えてくださる皆様のご尽力のたまものと深く感謝しております。



「補欠ゼロ」と「出場機会確保」の徹底

1. 4種年代サッカーの本質

運営方法や時代が変化しても、4種年代サッカーの本質は変わりません。勝敗のみを追い求めるのではなく、子どもたち一人ひとりが心からサッカーを楽しんで、長く続けられること、仲間とのつながりの中で成長していくことこそが最も大切です。「補欠ゼロ」「出場機会の確保」試合に出場する時間の長短に関わらず、すべての子どもたちがチームの大切な一員であり、それぞれが成長の機会を得ることが重要です。仲間を応援すること、支え合うこと、挑戦すること、そのすべてが子どもたちの成長につながります。

あいさつや礼儀、思いやりの心、最後まで諦めない精

神など、サッカーを通じて学べることは数多くあります。北海道の厳しい冬を乗り越え、限られた環境の中で工夫し努力を重ねる経験は、競技力だけでなく人間的成長にも深く結びついております。

こうした本質を守り続けるためにこそ、私たちは運営体制の整備と環境づくりに真摯に取り組んでまいります。

近年、少子化による競技人口の減少、地域間の環境格差、気候変動による夏季の気温上昇など、これまで経験してこなかった課題への対応が求められています。本年度はこうした状況を踏まえ、以下の取り組みを進めてまいりました。

子どもたちの命と健康を守る

2. 暑熱対策



夏季に30度を超える日が増加し、特に人工芝グラウンドでは体感温度がさらに高くなる状況が続いております。4種年代の選手にとって、過度な暑さの中での試合は身体への負担が大きく、十分な配慮が不可欠です。本年度は一部大会について夏開催から秋開催への移行を進めました。学校・地域行事や施設利用との調整、さらには大会スケジュール全体の見直しなど多くの課題がありましたが、スポンサー様をはじめ関係各所のご理解とご協力のもと実現することができました。秋開催への移行により、選手たちがより良い環境の中で力を発揮できることを期待しております。

また、開催時期の見直しにとどまらず、給水時間の確保・試合間隔の調整・WBGT値を参考にした大会運営・テントや休憩場所の設置など、現場における取組も継続しております。かつての北海道の気候を前提とした運営では対応が難しい時代となっており、子どもたちの命と健康を守るため、引き続き柔軟な対応を進めてまいります。

運営者の継続性のために

4. 働き方改革



指導者・運営者の負担軽減も重要な課題です。限られた人数の指導者や役員が、日常の活動運営から大会準備・審判対応・会議運営まで多くの役割を担い、広域移動を伴う長時間の業務が続いている現状があります。現場を支える方々が無理なく活動を継続できる体制づくりは、選手の健全な育成環境を守るうえでも不可欠です。

本年度は業務の分担や大会運営の簡素化(U-10南・北大会および全日本U-12サッカー選手権の開催日短縮)を推進するとともに、オンライン会議・デジタルツールの活用による情報共有の効率化にも取り組んでおります。保護者・地域関係者の皆様にもご協力をいただきながら、「北海道(地域)全体で子どもたちを育てる」という意識のもとに、持続可能な運営体制の構築を目指してまいります。

北海道全体で子どもたちを育てる

6. 結びに



4種年代のサッカーは、選手だけで成り立つものではありません。保護者・指導者・審判員・地域関係者など、多くの方々の支えによって初めて成り立つものです。関わるすべての皆様が互いに協力し、「北海道(地域)全体で子どもたちを育てる」という意識のもとに力を合わせることで、今後ますます重要となります。

子どもたちが安全で楽しくサッカーに取り組める環境づくりを進めるとともに、北海道らしい地域に根差した4種年代サッカーのさらなる発展に努めてまいります。引き続き、皆様の温かいご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

持続可能な協力体制

3. 主管大会の運営体制



本年度は、主管大会の輪番制についても見直しを行いました。これまでの地区割による主管体制は、地域によって人口規模や運営スタッフ数に差があり、一部地域への負担集中が課題となっておりました。北海道は移動距離が長く広域での運営が求められる地域特性もあることから、持続可能な大会運営体制の構築が急務となっておりました。

そのため、新たに「ブロック割」による輪番制へ移行いたしました。近隣地区が連携して大会運営を担うことで、人的負担の分散と運営ノウハウの共有が進み、より安定した運営が期待されます。大会は特定の地区だけで支えるものではなく、北海道全体で協力しながら選手の成長を支えていくものであるという意識を、改めて共有してまいります。

サッカーの裾野を広げる

5. 普及活動



少子化が進む中、誰もが気軽にサッカーに親しめる環境づくりも重要です。キッズ事業やすきまフットボール部会との連携をはじめ、幼児・初心者・女子選手への支援、地域を越えた交流機会の充実、子どもたちが安心して活動できる場の整備など、多様なニーズに応えていく取組を推進してまいります。「楽しい」「またやりたい」と感じる子どもたちを一人でも増やしていくことが、北海道サッカーの未来につながるものと確信しております。



第4種委員会 委員長 尾見 秀樹
2024年度第4種委員長に就任

医学委員会の 活動報告と 今後の展望

安全が創る、 最高のパフォーマンス

公益財団法人北海道サッカー協会 医学委員会 委員長 神谷 智昭

1. はじめに

医学委員会では以前から、現場での医療サポートを中心に活動してきました。それに加えて近年では、安全な競技環境の構築にも力を入れています。医学委員会の役割は単なる負傷への「事後処置」から、リスクを予見して未然に防ぐ「予防管理」に移行してきています。安全に長く競技を続けられる環境が、北海道サッカーの競技力向上に寄与すると考えています。

外傷治療から「包括的アスリート管理」へ

2. トレセン活動での医療サポート

国スポ(国民スポーツ大会)および各種別トレセンにおいて、ドクターとトレーナーを派遣しています。現場での外傷に対する応急処置や救急対応だけでなく、レクチャーや超音波を用いたメディカルチェックを通じて、怪我の予防やコンディショニング方法について伝えています。また、感染症などの内科的疾患が発生した場合も、医学委員会で情報を共有して管理しています。近年は内科的な持病がありながらもプレーできる選手が増えてきました。そのような選手についても事前に情報を収集し、適宜対応するようにしています。今後は現在の課題である医療物品の整備、次世代を担う医療スタッフの育成、技術委員会と協力したフィジカル強化に取り組んでいきます。また課題となっている精神的な問題、脳震盪の急性期および後遺症への対策、栄養指導などは、専門家からアドバイスを得られる環境整備を始めました。これにより、安全面でも選手強化の面でも、より充実したサポートを実践できると考えています。一方でこれまでの活動が認められ、JFAの育成世代代表チームの医療スタッフに継続的に選ばれています。代表チームでの経験を北海道に還元し、さらには世界へ羽ばたく医療スタッフと選手を輩出したいと考えています。



国スポ少年男子のキャンプの様子

EAP(緊急時対応計画)の標準化と導入

3. 大会運営に関わる安全管理

選手、指導者、審判、大会運営スタッフ、そして観客を含めたサッカーに関わる全ての人の安全を守るのも医学委員会の使命だと考えています。北海道では全国に先がけてJFAスポーツ救命ライセンス講習会を開催しています。講習会は心臓突然死、CPR(心肺蘇生法、AED)、脳震盪、熱中症などの講義と、AEDの使用や搬送の実技から構成されています。サッカー現場での正しい救急処置を学ぶことが目的であり、医療従事者だけではなくサッカーに関わる全ての人に受講してもらいたい内容です。HKFAの戦略的投資事業として開催回数を増やし、受講者数の増加と持続可能な運営を目指して展開しています。特にリスクの高いシニア世代、試合中選手の一番近くにいる審判を対象に、まずは普及活動を行いました。また今後は、大会運営における安全管理としてEAP(Emergency Action Plan;緊急時対応計画)の標準化と導入を検討しています。これは医療機器の準備状況の確認や、緊急連絡体制(AEDを持ってくる人、119番へ通報する人、バックボードを持って行く人)、搬送経路(救急車の経路、搬送先の当番病院の確認)を事前に決めておくものです。組織の安全管理能力を飛躍的に高めるガイドラインであり、近年のスポーツ現場ではEAPの整備が重要視されています。実際にプロチームの活動では標準化されてきており、まずは北海道内の主要大会から導入を検討しています。その際は、ご理解とご協力を賜ればと思います。



JFA救命ライセンス講習会の様子

5. まとめ

現代のスポーツ組織運営において、安全な環境が最高のパフォーマンスを生むと考えられています。安全な状況を作るためには人的要素だけではなく、環境要因や法的な問題等の、乗り越えなければいけない課題が多くあります。医学委員会は現場の医療サポートの枠を超え、医療者や指導者、審判に対する啓発活動、科学的なフィジカル強化、そして包括的なリスク管理を担う組織として発展させようと思います。北海道から世界に飛び出す選手の育成への貢献と同時に、北海道での医療サポートモデルを日本や世界に発信できるように委員会活動の活発化を目指しています。そのために関係各所の皆様の、より一層のご協力をお願い申し上げます。

1. 準備・配置 (Preparation)

医療機器(AED等)の
準備状況と配置場所の
事前確認



2. 緊急連絡体制 (Communication)

役割の事前決定

- ・AEDをもってくる人
- ・119へ連絡する人
- ・担架をもっていく人



3. 搬送経路 (Transportation)

救急車の進入経路確
保、搬送先当番病院の
事前確認



すべての関わる人の命を守る救命講習

4. セミナー開催による啓発活動

上述のように医学委員会での活動の幅が大きくなり、従事する医療スタッフも多くなりました。以前から年に1回、医学セミナーを開催し最先端の知識を得る機会を設けています。代表チームのドクター、トレーナー、Jリーグで活躍するコンディショニングコーチにご講演いただいたり、日本の最先端の研究をしている講師を招いて勉強会を重ねてきました。その成果もあり北海道内でも講師を担える人材が育ったことから、去年はシンポジウム形式でいくつかのテーマを扱い議論を深めました。今後はさらに充実した内容で実施できるよう、準備を進めていきます。また本セミナーも医療従事者に関わらず、どなたでも参加可能なため、多くの皆様の来場をお待ちしています。



医学委員会 委員長 神谷 智昭
2022年度医学委員長に就任

千歳地区の 現状と 今後の展望

誰もが輝ける サッカー環境を目指して

千歳地区サッカー協会 理事長 北国 浩

幅広い世代が繋がる、新しいサッカーの形

当地区は、千歳市・恵庭市・北広島市の3市各サッカー協会で構成されております。2025年度のチーム数は40チーム、選手登録数は1287名でした。前年度と比較しますと、選手登録数は72名、チーム数は1チームの減少となっています。今年度はU15女子チームを立ち上げ活動を始めました。またレディース&ガールズフットサルフェスティバルを開催し4歳の女の子から60代の女性まで幅広い世代の方が参加、運営には地区内の女子チームからスタッフ・選手が携わり、女子チーム間の繋がりがりや交流を深める良い機会となりました。

地区協会の構成
3市のサッカー協会で構成し、運営



千歳地区の現状 (2025年度データ)

1,287↓

登録選手数

▼ 前年度から72名の減少

40

登録チーム数

▼ 前年度より1チーム減少

女子サッカーの新たな一歩と広がる未来

新たにU15女子チームを立ち上げ、
女子選手の育成を強化



レディース&ガールズフットサルフェスティバル

世代をこえて楽しむ女子サッカーの輪



暴力・暴言・ハラスメントのない現場を目指して

ウエルフェアオフィサー委員会においては、マッチウエルフェアオフィサー新規講習会及びクラブウエルフェアオフィサー研修会を開催するほかウエルフェアオフィサージェネラル新規講習会への受講者あり、サッカーを楽しむサッカーファミリーの

安全・安心を守りより快適なサッカー環境を構築するとともにサッカーの活動における暴力・暴言・ハラスメント等の行為の根絶に向けて一丸となって取り組んでいます。

ウエルフェア(安全・安心な環境づくり)

ウエルフェアオフィサーの育成



マッチウエルフェアオフィサーやクラブウエルフェアオフィサーの講習・研修会を開催し、専門人材を育成

暴力ハラスメントの根絶



サッカーを愛するすべての人が、安全・安心かつ快適にプレーできる環境の構築に一丸となって取り組む

経験を問わず楽しめるスポーツの場づくり

4種においては、U9以下世代へ楽しめるサッカーとフットサルの取り組みとして、サマー・ウィンターフェスタを開催しています。試合以外での活動では、審判に対しての接し方や発言、観戦マナーの注意喚起等々を含め、ハンドブック『めざせ！ベストサポーター』を各チームへ配布した他に、今年度

からは、地区内の幼稚園や保育園への巡回指導を推進していきます。新たな取り組みとしてサッカー未経験者や運動が苦手な方でも気軽に参加できるウォーキングフットボール体験会を開催し、誰もがサッカーの楽しさに触れられる環境づくりの構築を図っているところです。

多様な取り組みで広げるサッカーの裾野

サマー・ウィンターフェスタの開催



U9以下の低学年を対象に、サッカー・フットサルの楽しさを伝えるイベントを開催

新たな挑戦・ウォーキングフットボール



サッカー未経験者や運動が苦手な方でも楽しめる「歩くサッカー」の体験会を開催

連携で広げる、サッカーファミリーの未来

今後の展望としましては、各自治体や関係機関との連携による施設整備を進めるとともに、危機感を持って、地区協会と各種年代指導者の力を結集し、サッカーファミリー拡大を目指して参ります。



千歳地区サッカー協会
理事長 北国 浩

いつでも・どこでも・だれでも サッカーとつながれる地域を目指して



オホーツク地区サッカー協会 理事長 斎藤 正倫

オホーツク地区の現状と課題

オホーツク地区は北海道北東部に位置し、北見市や網走市、紋別市をはじめとして18の市町村(3市14町1村)があり、人口は24万8000人と減少しています。これに伴い選手登録数も減少傾向にあり、特に第2種年代では2019年度の305名から2024年度には154名と半減、第3種・第4種年代でも小規模な自治体では単独の小学校・中学校でチームを編成することが難しく、複数地域による「合同チーム」の結成や、地域のクラブチームへの移行・統合が進んでいます。一方でシニアカテゴリーの登録者数は維持・微増傾向にあり、生涯スポーツとしてのサッカー文化の根付きが伺えます。2025年度の活動は4月6日の総会からスタート、加盟団体代表者69名のうち51名が集いました。その後常任理事会を計4回開催し、地区内のサッカー環境の整備や課題解決に向けた具体的な協議を重ねました。

第2種(高校生)年代の登録者数が
5年で半分に激減

2019年:305名



2024年:154名

「合同チーム」とクラブ移行による
チーム編成の加速

第3種(中学生)・第4種(小学生)では単独チーム編成が
困難となり、地域を超えた連携がすすんでいる

シニア種は維持・微増で
生涯スポーツ化が定着

若年層が減少する一方で、シニア総の登録は安定しており、
年代を問わずサッカーを楽しむ文化が定着している

各カテゴリーの活躍と実績

各種別委員会では計画に基づいて事業が展開されました。

第1種では第23回道東ブロックリーグにFC網走とFCコパンが参戦し、両チームともに北北海道ブロックリーグへの残留を果たしました。

第2種では遠軽高校が高校選手権北海道大会に出場し、1回戦で道科学大高校をPK戦の末に破る健闘を見せました。第3種ではクラブユースU-15選手権でFC網走U-15が3回戦進出、また、U-15フットサル道東ブロック大会においてJOGATURAが見事に優勝を果たしました。

第4種ではU-10北北海道大会において斜里サッカースポーツ少年団やEVO.KITAMIが決勝トーナメントに進出する成果を上げました。

女子では、11月の全道女子ユース(U-15)フットサル選手権大会においてFC網走メニーナ・ラペーナ・ロッカフォルテ合同チームが予選を勝ち抜き、全道ベスト8に進出する快挙を成し遂げました。

今後の強みと展望

次の世代のために「アクセス・フォー・オール～いつでも・どこでも・だれでもサッカーとつながれる環境～」をいかにつくっていくかが、私たちが向き合うべき課題です。

課題解決に向けて、まずは自分たちの持つ強みを活かしていきたいと考えています。

まずは豊かな環境です。豊富な天然芝のグラウンドとともに、遠軽町や紋別市に整備された人工芝のグラウンド、さらに美幌町や紋別市に整備された屋内人工芝施設を活用し、シーズンを通してサッカーができる環境を整えていきます。また、秋春制に移行するJリーグやWEリーグのキャンプ地となることも決まっており、日本トップレベル選手たちとの触れ合いを通して地域のサッカー熱がさらに高まるものと期待しています。次に挙げられるのは若い指導者の存在です。育成年代に当地区で育った選手たちが成人しコーチとして地元に戻って子どもたちを指導する、そんな嬉しい循環が生まれている地域があります。若い指導者たちが指導の質をさらに向上させることでさらに良い選手が育つとともに、その循環を次の世代に繋いでいけるものと期待しています。キッズの取り組みも重要です。各地で幼稚園巡回活動や少年団主催のキッズサッカー教室など、普及活動が精力的に展開されています。こうした活動を組織化し、さらに効果的に展開していきたいと考えています。

技術委員会事業では、U-12秋季交流大会で過去最高成績(2位トーナメント2位)を収め、1名がMIP賞を受賞しました。道東トレセンキャンプには全カテゴリー合わせて16名が参加し、女子U-12から1名が北海道トレセンエリートキャンプへ選出されました。

指導者養成ではD級講習会やリフレッシュ研修会が開催され、B級・GKレベル2取得者への補助も行われました。

審判委員会ではユース審判員の全道・全国大会等への派遣や、オンラインおよび実技を交えたWEB勉強会・研修会を精力的に実施しました。

フットサル委員会ではフットサルフェスティバルや社会人フットサルリーグをはじめ、オータム・ウインターなど各大会の運営や、全道大会への地区予選・選抜派遣を行いました。

シニア委員会ではO-40リーグおよびO-50リーグを開催したほか、フェスティバルや全道大会へも積極的に参加しました。

移動距離が長いことによる保護者への負担増や、諸経費の負担増など、解決しなければならない課題もあります。各地区協会の取り組みを参考にさせていただきながら、課題解決に向けて努力していきたいと存じます。何卒よろしくお願いします。



強み1:充実した環境施設とJリーグ等のキャンプ誘致



強み2:地元出身の若い指導者による育成循環



強み3:キッズ・幼稚園等への普及活動組織化



オホーツク地区サッカー協会
理事長 斎藤 正倫

宗谷地区で 出来ること 日本のてっぺんを 熱くする



宗谷地区サッカー協会 理事長兼技術委員長 本山 哲司

宗谷地区サッカー振興計画

転出や自然減による人口減少が加速し、深刻な状況となっている宗谷地区ですが、熱き関係者たちの思いで「サッカー人口を増やし、質を上げ、老若男女すべての世代でサッカーに関心が持てる」をテーマに活動しております。

8つの重点項目

育成・普及

1. 次世代のサッカーファミリーを育む

離島を含む管内全幼稚園、保育所を最低1回は巡回する。また、幼稚園児を対象にした、サッカースクールを開催する。



巡回指導を通じてサッカーの楽しさを伝える

2. 少年団への入団促進

巡回授業から少年団への入団のきっかけを作り、低年齢からサッカーに携わる機会を創出する。



サッカーを始めるきっかけを、もっと身近に

3. 回数が、未来を切り拓く

トレセン活動を頻繁に行い、常にサッカーを考えさせる環境づくりを構築する。

4. 全道基準で、チームを鍛える

全道大会やブロック大会で、他地区のチーム・個人と戦えるチームの育成。



5. 持続可能な活動を支える仕組み

単独チームが作れず、リーグ戦が開催できなかった社会人チームの活動の場を提供するため、宗地区独自の1～3種(トレセンチーム)及び女子チームを含めた合同リーグの創設。

6. 審判員の確保と育成

リーグ戦の増加にあわせた審判員の確保と、育成・質の向上。

7. 育てる力を、育てる

指導者・チーム関係者の質の向上。MWO・CWO取得に向けた意識改革。



8. 地域一体感の醸成

地区協会関係者がコミュニケーションを図り、情報交換できる交流の場の設定。

すでに取り組んでいる項目もありますが、それぞれを強化・発展させ、重点項目として活動していく。

各地区、課題はあろうかと思いますが、サッカーファミリー全員で北海道を盛り上げていきましょう。

「日本のでっぺんを熱くする」をテーマに宗谷地区はこれから歩みを進めていく次第です。



宗谷地区サッカー協会
理事長兼技術委員長 本山 哲司

活動状況と持続 可能な事業 運営への課題

競技の魅力と連携で広がる 自治体スポーツの未来

北海道自治体職員サッカー連盟 理事長 八木 康年

回復の兆しと熱戦の記録

1. 昨年度(2025年度)事業報告

昨年度における当連盟への加盟登録数は33自治体となり、コロナ禍以降、登録チーム数は徐々に回復傾向にあります。

・第55回全道自治体職員サッカー選手権大会(6月／釧路市)

参加チーム数は13チームとやや少数での開催となりましたが、限られた交代要員の中で熱戦が繰り広げられました。結果は、優勝：札幌市役所、準優勝：函館市役所、3位：釧路市役所、4位：室蘭市役所となり、上位2チームは7月に沖縄県で開催された全国大会に北海道代表として出場し、健闘いたしました。

・全道自治体職員フットサル大会(北ブロック：11月／中標津町、南ブロック：1月／札幌市)

北ブロック大会は参加3チームと厳しい状況ではありましたが、北広島市役所が優勝を果たしました。一方、南ブロック大会には21チームという多くの参加をいただき、活気ある大会となりました。その中で少数精鋭の戦いを見せた名寄市役所が、昨年度に続き見事連覇を達成いたしました。

コロナ禍からの回復

33自治体



第55回全道自治体職員 サッカー選手権大会

(6月/釧路市)参加13チーム

優勝	札幌市役所
準優勝	函館市役所
3位	釧路市役所
4位	室蘭市役所

全道自治体職員 フットサル大会

【北ブロック】(11月/中標津町)参加3チーム

優勝	北広島市役所
----	--------

【南ブロック】(1月/札幌市)参加21チーム

優勝	名寄市役所
----	-------

全道大会の着実な実施と全国大会への挑戦に向けた事業展開

2. 今年度(2026年度)事業計画

今年度もサッカー、フットサルともに以下の通り全道大会の開催を予定しております。

・第56回全道自治体職員サッカー選手権大会

期日：2026年6月12日(金)～14日(日)の3日間

会場：札幌市

※本大会の上位チームが出場する全国大会は、7月24日(金)より6日間、栃木県宇都宮市(全国32チーム参集)にて開催予定です。

・全道自治体職員フットサル大会

【北ブロック】10月31日(土)～11月1日(日)／帯広市

【南ブロック】2027年1月23日(土)～24日(日)／室蘭市

競技環境の変化を力に変える持続可能な発展への挑戦

3. 当連盟の現状と今後の課題

全体の加盟登録チーム数に回復の兆しが見える一方、各自治体・各チームの足元の事情に目を向けると、深刻な「選手確保の難しさ」に直面しております。近年は単独でのチーム維持が困難となり、合同チームを編成して大会に出場するケースが増加しています。職員の年齢構成や採用状況を鑑みても、この傾向は今後さらに強まるものと懸念されます。

当連盟といたしましては、この環境変化を真摯に受け止め、合同チームの参加規程整備や運営サポートなど、時代に即した柔軟な対応を模索してまいります。これからもサッカーとフットサルが持つそれぞれの魅力を最大限に引き出し、より多くの公務員がスポーツに触れ、心身の健康増進や自治体間の交流を楽しめる事業運営を目指してまいります。



北海道自治体職員サッカー連盟
理事長 八木 康年

チャレンジド サッカーの取組 誰もが輝ける舞台へ



北海道チャレンジドサッカー連盟 会長 佐橋 正智

設立から未来への架け橋

1. すべての人が「ずっと続けられる」場所を

2002年2月に北海道ハンディキャップサッカー連盟として発足し、主に知的障がいの方たちにサッカーの楽しさ、サッカーを通じた成長や希望を享受するための活動を続けて参りました。人気上昇のJリーグや日韓共催ワールドカップ等で、日本中がサッカー熱で盛り上がる中、ハンディを抱えた人たちにも「サッカーをしたい」というニーズが増えていくことはごく自然のことでした。地域の少年団や学校の部活動に入っても、監督やコーチの指示が理解できない、ミーティング等で話している意味がわからない、それらにより身体的能力は高くてもチーム

の戦術に合わせた動きができないなど、障がいに起因した様々な困難に直面し、中には自然とサッカーから離れてしまう現状もありました。また、高等支援学校の部活動では、思う存分サッカーを楽しみ、技術やプレーの上達も進みましたが、自分たちの力を試す大会や対外試合の場が少ないという現状もありました。それらのニーズに応えるべく、本連盟が発足し、サッカーが好きな人たちがずっとサッカーを続けられることができるよう、今日まで活動を続けてきました。

多様な交流と挑戦

2. 昨年度の主な活動

昨年度は、主要な大会として小学生から社会人を対象にした11人制大会・8人制大会・フットサル大会、高校生を対象とした高等養護学校大会(昨年は8人制)、交流事業としてU18フットサル交流会を実施しました。また、チームに所属していない小中学生も含めて対象としたジュニア交流会、同様に高校生以上を対象にしたサッカーフェスティバル、年代問わず女性を対象とした女子サッカー教室を実施しました。旭川地区でも、サッカー教室とフットサル教室を開催しています。また、本連盟が主管となり、道内で活動する各障がい種別の団体と

共同でインクルーシブフットボールフェスタ2025を開催し、サッカーを通じて誰もがスポーツの楽しさを享受するよう努めました。また、1月には静岡県藤枝市で開催された「もうひとつの高校選手権」に、北海道・東北地区予選で勝ち抜いた札幌あいの里高等支援学校が2年連続で出場しました。ちなみに予選は、札幌で岩手県3校合同チームと決定戦を行い、勝利して代表をつかみ取っています。今年は青森県弘前市で予選開催の予定です。

U18選抜活動の試行から本格展開へのステップ

3. U18の取り組み

昨年度、当初予定にはなかったのですが、高校生年代の選抜チームを試験的に編成しました。8月上旬のサッカーフェスティバルの参加者を中心に、何人かの選手を選抜し、何回かの練習を経て、10月に実施した北海道・東北予選会で、予選出場校と交流試合を行いました。昨年は、試験的な取り組みでありましたが、今年度からは計画的に取り組み、連盟加盟の各校の協力をもらいな

がら、8月から練習を開始し、遠征も含めた対外試合等の設定ができればと準備中です。安全な移動手段や経費負担等の課題は大きいのですが、選手たちの成果を発揮する場として何らかの場をつくりたいと考えています。この取組が定着すれば、将来的には本格的なトレセン活動へとステップアップさせたいと考えています。

自由に楽しむサッカーへ

4. 2026年度の取り組み

今年のスローガンを「Free Enjoy Football」と決めました。「自由に楽しもう、フットボール」「楽しみ方は自由だ、フットボール」という意味を込めており、誰でも気軽にサッカーを楽しもうというメッセージも含んでいます。サッカーそのものばかりではなく、サッカーを通じての仲間意識や身体心地よさ、家庭や学校・職場以外での活動の充実等々、個々の目標や期待を持ってサッカーに関わることができればと思います。

小中学生以下を対象にサッカー教室を開催し、楽しいと実感することを重視し、年代が上がるにつれ「勝ちたい・上手くなりたい」というニーズと「サッカーを楽しく行いたい」というニーズの両方をかなえていくことを、今年度も継続して目指します。本連盟が主催する各大会でも、

優勝・勝利を目指すグループと楽しむことを目指すグループに分けて運営し、個々の障がいの程度やモチベーションに適した試合方式を設定していきます。また、チームに所属していない人や部員の少ないチームで活動している人なども、大会への参加はオープンにしておき、他チームとの合同や連盟推薦チームの編成等で配慮していきます。

その他の活動として、チャレンジドサッカーフェスティバル、女子サッカー教室、インクルーシブサッカーフェスティバル、旭川地区サッカー教室・フットサル教室、高校生年代を対象としたフットサル交流大会等を予定しています。連盟としては、可能な限り毎年の活動を継続するということを重要視しています。

競技志向



エンジョイ志向



競技継続と環境維持への挑戦

5. 課題

毎年のように挙げられる課題ですが、サッカーに取り組む人(チーム)の減少です。コロナ禍を節目に、ジュニアチームや社会人チームが激減し、それぞれのカテゴリーでの試合実施が難しくなっています。高等支援学校の部活動も人数の減少が見られ、11人以上の人数が揃っている学校が少なくなってきました。毎年7月に実施している高等養護学校大会では、コロナ禍以降11人制から8人制に変更しています。北海道の高校チャンピオンを決める大会と位置付けていますので、11人制でも多くの学校がエントリーできるように勢いを回復させたいと思っています。

チーム数の減少は財政面にも大きく影響があります。先述のU18の取組でも、対外試合を組む際の経費や運営に携わる人たちへの費用等が大きな課題となっています。ここ数年で、活動に理解をしていただく企業様にご支援をいただけるようになりましたが、スムーズな運営とは言えない状況です。連盟加盟費や大会参加費の値上げなども検討はしていますが、裾野を広げたいという思いと逆行する面もあり、現状維持を続けています。今後、諸経費の高騰が進む中、各チームに負担増をお願いする

可能性もありますが、まずは加盟チームを増やすことに力を注いでいきます。

北海道チャレンジドサッカー連盟は、道内の主に知的障がいの方々にサッカーの場を提供することが大きな使命です。そのために全道各地でサッカーの活動をしている方々やサッカーが好きな方々とつながりを持って、やりたい人みんながサッカーに触れられるよう、今後も活動を継続・拡大できるよう努めて参ります。



北海道チャレンジドサッカー
連盟会長 佐橋 正智

北海道のサッカー・フットサルの未来を共に -ご寄付の報告-



FOOTBALL FAMILY ご寄付いただいた法人のご紹介



北海道物流株式会社

税理士法人 田中会計事務所

富士園産業 株式会社



榊原工業 株式会社



Companies with a period vision



株式会社 誠和工業



日北自動車工業



北海道パルテック株式会社

東亜道路工業株式会社



RESEPAグループ



未来につなぐ活動 への投資



大会環境の整備



女性活動支援やすきまフットボール開催
などの事業費の一部として活用されます

企業名入りのインタビューポート作成な
ど、大会を彩る備品に活用されます

皆さまからのご寄付は、道内サッカー・フットサル事業の
未来につなぐ活動に使用させていただきます。
心より感謝申し上げます。

